

谷鼎歌碑めぐり

谷鼎歌碑めぐり

谷鼎歌碑めぐり



谷鼎歌碑

ひぐらしのこゑを背に
夕あかねの中ひぐらしの
声に耳をかたむけ

谷鼎の略歴

谷鼎は、明治二十九年（一八九六）九月十六日、谷鼎次郎の長男として生まれた。神奈川県中郡西秦野村千村（現在の秦野市千村）に幼少年期を過ごし、地元西秦野村立尋常高等小學校を卒業のち、明治四十四年、神奈川県師範学校（鎌倉師範）に進学した。さらにその後、東京高等師範学校、京都帝国大学に学んだ。

東京府立第五中学校（現在の小石川高校）の教職をつとめながら、万葉・古今・新古今等の和歌研究に従い、あわせて窪田空穂の短歌誌「国民文学」の歌人として頭角をあらわしてゆく。

昭和六年、谷鼎の名を世に高めた斎藤茂吉との花紅葉論争がはじまる。藤原定家の名歌「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」の解釈をめぐる、上の句を実景とする斎藤茂吉と、新古今時代の美の規範をあらわしたとする谷鼎との間に、二年にわたって論争が交わされた。

さらに昭和十六年には第一歌集『伏流』を刊行し、論・作両面に活動する存在として歌壇に独自の位置を占めた。

昭和二十年、空襲で東京の自宅が焼失し、秦野に帰住。郷里の風土に根ざした数々の佳作が詠まれてゆく。小田急線渋谷駅南口広場の歌碑に刻まれた、ひぐらしの一つのみ鳴くこゑを背に夕あかね照るみちくんだり行く

の歌も、ふるさとの坂道を詠み、夕あかねの中ひぐらしの声に耳をかたむける作者の姿が印象深い。

昭和二十六年には大東文化大学教授に就任。和歌研究の大家の一人として活躍するとともに、歌人としても第一線に立つて活動し、歌誌「近代詩歌」を創刊、主宰した。昭和三十五年（一九六〇）七月十五日、六十三歳で逝去。

歌集には前記の『伏流』をはじめ『青あらし』『冬日より』『松籟』『水天』の五冊があり、没後四十年に『定本谷鼎全歌集』としてまとめられた。研究書には『定家歌集評釈』『短歌鑑賞の論理』『近代短歌の鑑賞と歌論』をはじめ多くの著作がある。また、大東文化大学・秦野市立西中学校ほか各地の校歌を作詞した。

解説 山田吉郎
（「水原」編集人）

*この表紙素材は、秦野木綿からとりました。秦野木綿は、明治後期から昭和30年代まで生産が続き、日本三大銘葉と言われた「秦野たばこ」と並び、秦野の近代化に多大な貢献をしました。意匠を凝らしたこの素材に、当時の職人の粋が感じられます。
*表紙短冊の歌は谷鼎直筆によるもので、小田急線渋谷駅南口広場の歌碑に刻まれています。



四十八瀬川



県立秦野戸川公園
(水無川上流)



秋の四十八瀬川



西小学校

堀川小学校



秦野市立図書館内園庭
夕暮歌碑

秦野市立図書館
秦野市文化会館

秦野商工会議所

秦野市総合体育館

木のもとに子供らかよりうつとりと
みてゐる花は泰山木のはな 夕暮

歌碑の歌

- ① 野にあがるひばりを聞けば幼くてここを通ひしわが姿見ゆ
- ② かへり来(き)し稲田のみらはすみとほる月夜あかりとなりてつづくも
- ③ やすらいて耳かたむくれただ白き四十八瀬はふかき谿(たに)の瀬
- ④ ひぐらしの一つのみ鳴くこゑ(え)を背に夕あかね照るみらくだり行く

沼代新町

① 西小学校「野にあがる…」

柳町

渋沢駅入口

曲松

至伊勢原

第一菖蒲トンネル

小田急線



渋沢駅



246

至秦野駅



② 渋沢小学校「かへり来し…」

千村配水場

曲松郵便局

稲荷神社

渋沢小学校

渋沢小学校入口

渋沢公民館

④ 渋沢駅南口「ひぐらしの…」

泉蔵寺

若竹の泉

戸須賀神社

白山神社

渋沢中学校



③ 谷家跡「やすらいて…」



桜の名所「頭高山」



渋沢丘陵から表丹沢の山並み

至松田

至新松田駅